
鬼さんこちら...

神聖龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼さんこちら…

【Nコード】

N2387A

【作者名】

神聖龍

【あらすじ】

一人の鬼が一人の女性に出会い、恋に落ちる…それが原因で鬼は

…

第一話：『紅舞』（前書き）

これは霜月さんに頂いたネタを元に作らせて頂きました。

第一話：『紅舞』

『やめる…金ならいくらでも渡す！だから…』
暴れる依頼主の胸に手を入れる、するとゴポッと音がして魂が抜き取られた。

「依頼完了…これより帰還する」
携帯を取りだし本部にそう報告をした。

俺の名前は紅舞^{べにまい}

黒髪にセピア色の瞳をしている。

この姿をしている間は体がひ弱そうな事もありよく女に間違われる…
冥界に戻り、俺は荷物をベットへ放り投げる。

俺がやっている仕事は冥界相談所と言う仕事、願いを叶える代わりに代償を頂くと言う仕事だ。

代償は色々あり命を奪うもの、体の一部を奪うもの、感情を奪うもの…様々な代償がある。

俺の代償は魂…その魂を食って生きている。俺は瓶に摘めた魂を取りだし口に入れた…

「まずい…」

そう一言呟きシャワーを浴びる。
ザア〜

とシャワーで汗を流す。

するとキイキイと音が聞こえた。

俺はタオルを巻き部屋を見ると、虫が一匹いた。
そして、俺を見つけると

『新しい依頼だ。』

人間界に行きこの人間の願いを叶えよ』
と声がする。

これは電電^{でんでん}と言う上が指令などを送る時に使う虫だ。

俺はハア〜と溜め息をつきながらも依頼主の写真をみた。写真には

優しそうな女性が写っていた。

この女性が後に厄介になるとは知らずに依頼主の所へ向かった。

「冥界相談所からやって来た。

紅舞と言います。

殺しから略奪何でも引き受けます。

ただし、代償は頂きますが……」

彼女との出会いに寄って運命は動き出す……

第二話：『新しい依頼』

「私の名前は霧島 恵と言います。」

私の依頼は、私の父と母に会いたいと言う依頼です。」
と言われて俺は詳しい話を聞いた。

「どうやら何者かに両親をさらわれたらしい。

警察には頼んだらしいが捜索に関係した警察は全員死んだらしい…

「はぐれの仕業だな…」

はぐれとは俺たち鬼で在りながら仕事をせずただ人間を殺す鬼の事だ。

「ややこしいが仕事だが…わかった。引き受けよう」

と仕事を引き受けまずは両親がいなくなった日を聞いた。

「今から一ヶ月前だから…8月18日」

「そうか…ちよつと待ってろ…」

と携帯を取り出す。

「ああ俺だ。悪いが8月18日に動いた鬼を教えてくれ…ああ、わ

かった。すまない」

パチンと勢いよく携帯を締める。

「とりあえず、しばらくは情報を集めつつお前を守る。」

そう言つて恵の部屋へ向かった。

家は広く、シャンデリアや絵画が金持ちと言つのを強調している。

ガチャ…

と扉を開くと、ベットに机、それに本と広い割にはシンプルだった。

「あまり、ごちゃごちゃするの嫌いだから」

と俺に笑いかける。

俺は『そうか』と一言だけ言つて恵の部屋を見渡した。

襲撃に来たときにどうするか等を考える為だ。俺が考えていると若い女の声が聞こえた。

『お嬢様、夕食の準備が出来ました。』

と扉を開けずにそう言った。

「分かりました。」

と返事を返し俺を見る。

「一緒に食事にしません？」

と突然、聞かれた。

昼にまずい魂を食べたこともあり断らなかつた。

俺たち鬼は、魂を必ず食わねばならないが、それ以外の物を食べる事もできる。

いわば、デザートのような物だ。

俺達は職業の事もありません。魂を食べる事が多いためによく食事を取るのだ。食事の間、恵は鬼の事を散々聞いてきた。

どんな仕事とか

いつから始めたのかとか

俺は質問に答えられる物だけ答えた。

そして、食事を終える時、

「やはり、食事は一人で取るより複数で取った方がいいですね」と笑顔を見せた。

俺はそんな表情を始めて見たので驚いた。

そして、笑顔のまま目から涙を流し始めた…

俺は両方共したこともない表情…

だから分からないが何故だかひどく悲しい気分に襲われた。

第三話：『吸血鬼』

その日、恵を寝かせ俺は外に出る。

大きい家に幸せな家庭…

昔の俺もそうだったのか…

いや、思い出すのはよせ…今は依頼人を守れ…

そう思いにふけていると心配がした。

「来たか…」

そう呟くと目の前に牙を生やした人間がいた。

「吸血鬼か…さらにやっかいな…」

そう言つて腰にある刀を抜く。

相手は吸血鬼に血を吸われた人間。

つまり、後天性吸血鬼だ。

すでに人間ではない…

ただ救いがあるとすれば…

「死、だけだ。」

そして、俺は集中した。

「ざつと、10人か…」

それを合図に戦いを始めた。

移動しながら攻撃をする。

一体…二体…三体…

順調に倒し続ける。

「なんだ…この違和感…」

刺客にしては弱い…

その時、気が付いた。

「囷…か」

チツ！と舌打ちをして雑魚を片付ける。

恵の部屋へ行くと予想通り吸血鬼がいた。

「予定より早いですね。」

と俺を見てそう言うと恵をチラリと見て再び俺を見る。

「やはりあなたを倒さなければ手に入りませんね…」

そう言うと敵の爪がジャキンと伸びた。

俺も剣を構え両者戦い戦いの準備をした。

先に動いたのは敵…

俺との距離を一気に縮めた。

しかし、俺は焦らずに横に飛び避けた。

そして、敵が俺を見て驚いた。

「その銀髪…紅舞！」

そう俺の髪が綺麗な銀色になっていた。

俺はその時、クスリと笑い

「くく…もう、遅い…お前はここで死ぬ。」

と今まで違う雰囲気か漂い始めた。

敵は明らかに恐れ始めていた。

「死ぬ前に答えろ、黒幕は誰だ？」

と聞くとビクリと体が動いた。

そして、敵はうオオオと叫び変形する。

「こいつ…後天性吸血鬼だったのか…」

後天性の為に力が収まりきらず力が暴走を起こしているのだ。

ガッシャーンと言う音と共に俺は敵と一緒に窓から落ちた…

第四話：『鬼とのバトル』

グルルウ…

と既に怪物へ姿を変えている敵…

「一応、名前を聞こうか？」

と刀を構えながら聞くと

「し…ん…慎…だ」

と苦しみながら答える。

「わかった…」

そう返事を返し剣を強く握った。

俺は慎との距離を一気に縮めた。

ザクリ…

と足に深く剣が刺さった。

慎はそんな事を気にもせず反撃してきた。

バキ！

と横から強い衝撃がやってきた。

そして、壁にぶつかりドーンと言っ爆発音が響きわたる。

パラパラと残骸が転がる中、俺は立っていた。

ペッ

と口にある血を吐きだし相手に集中する。

馬鹿のようにでかい鬼…歴史書に出てきそくないわゆる『赤鬼』

ガタイは凄く、痛覚が鈍くなっており力が凄い鬼…

グオオ！

と大きく叫んだ。

「相変わらず知性はなし…か」

とぼやきながらも相手を見る。

慎…いや鬼が俺を確認した瞬間、

ス…

と消えた。

「な！」

と後ろを見ると鬼が両の拳を組んで構えていた。

「しま…」

ダアアン！

と鬼が組んだ拳をおもいつきり振り降ろした。

鬼が拳を振り降ろした場所は大きく陥没していた。

そして、俺はぎりぎりですべて避けていたが破片で片足をやられた。

「足に傷があるのにこんな動きが出来たとはな…」

と驚きながらも再び剣を構えた。

鬼はニヤリと怪しく笑い、再び消えた。

ザクリ…

と今度は俺の剣が深く刺さった。

「二度も同じ手は食わない…」

と俺は剣を抜き一度、鞘におさめた。

「お前にいいものを見せてやる…瞬きもするなよ…」

と一気に剣を抜いた。

ススス…

と素早く剣が舞う…

そして、剣を鞘になおし、後ろを向き歩き出した。

「舞い散る桜の如く…散れ…『乱れ桜』」

と言うと鬼の身体中が切り刻まれ血飛沫が吹き出した…

その様子はまるで桜が舞い散っているような感じだった…

第五話：『朝』

次の日の朝…

俺は結局、一睡もせずには恵を守る為に見張っていた。

朝の六時になると

ピピピ…

と電子音がなり響いた。

そして、恵はムクリと起き上がり

俺を見て『おはよう』と言った。

俺も『ああ』と返事を返すと窓へ向かった。

そして、シャツとカーテンを勢いよく開き、窓を開けた。

同時に眩しい光がさしこんできて、外ではチュンチュンと雀が鳴いていた。

そして、俺は恵に部屋を追い出された。

理由は簡単だ。

着替えるから…そう言っただけで俺を無理矢理ドアから出したのだ。俺は仕方なくメイドに案内されて食事の場所に向かった。

相変わらず無駄に広い空間…ただ食事をするだけなのに何故こんなに広いのか俺には分からなかった…

しばらくボオ〜っとしていると制服の恵が現れた。

「お前、学生だったのか？」

と質問すると嬉しそうにクルクルと回り

「似合っでしょ？」

と笑いながら聞いてくる。

俺は何も答えずに椅子に座る。

恵は『もう…』と少し怒りながらも座った。

『いただきます。』

そう同時に言っただけで食事をとる。

朝食を食べる何て何年振りだろう…

と考えている内に食事を終えてしまった。

「ごちそうさま」

と言って立ち上がり外に出た。

するとメールが来ていた。

内容は

『学園の編入を手続きして置いた。制服は添付しておく…』

それから、そちらに応援を二人送った。

明日には着くはずだ。

二人ははぐれ撃退として送るがお前も協力して遂行するように…

以上』

と書いてあった。

添付ファイルを再生するとブレザーにネクタイなど制服が出てきた。

俺は中に入り部屋を一つ借り着替えた。

刀はデータに変換し携帯に入れた。

そして、外に出ると恵が驚きながら俺を見ていた。

「すっごお〜い」

と感心していたが俺には何が凄いのか全く分からなかった…

第六話：『学校』

まったく…なんでこんなに面倒事が多いのか…
さつきからすれちがう女が全員、俺を見る。

そして小声で

『かつこいい…』

『隣の子、彼女かな？』

と勝手な事ばかり言っている。

俺はうんざりしながらも学校へ向かった。

下駄箱に着くと恵が友達に挨拶する。

俺は職員室に行かなくてはならないので一旦別れた。

数十分後…

「職員室…何処だ」

と迷っていた。

しばらくうろつろつしていると

『職員室はそこを右よ』

と聞き覚えのある声が出た。

俺が振り向くとそこには

『やつほく久しぶり』

静しずかがいた。

静は同じ仕事をしている仲間だ。

黒い長髪に薄く赤い目の女…

普通に見ると可愛いと言う言葉が1番当てはまる。

「まさか…あんたが応援の一人か？」

「ご名答、もう一人にも、もうすぐ会えるわ」

「もう見当はついたけどな…」

と会話をしながら職員室に向かった。

ガララ…

と扉を開けて

『失礼します。』

と同時に挨拶をして用件を伝える。

すると、一人の教師に連れられ一緒に歩き2年4組と書かれている
札の所で止まる。

ガララ…

と先に教師がザワザワと騒がしい教室の中に入った。

そして、しばらくして入って来いと合図をされた。

教室の中に入ると女子がキヤーキヤー声を出す。

次に静が教室に入ると男子が騒ぎだした。

騒がしい教室の中、俺と静は黒板に名前を書いた。

「くれないに舞うと書いて紅舞です。よろしく」

「静寂の静と書いてしずかです。よろしくお願いします」

と自己紹介をする。

そして、窓側の後ろ二席を指差され

『あそこが空いてるな』

と言われて俺達は席に向かった。

その途中で俺を転がせる為に足が出てきたが踏みつけて席に座った。

もちろん、その男子が後で仕返しをしてくるのは予想済みだ…

第七話：『リンチ』

昼休み

『ちよつと面かせや』

と言われ俺の腕を掴み屋上に連れこんだ。

『お前、ムカツクんだよ…ちよつと女にもてるから…てよ！』
と話しながら俺を殴る。

俺は両腕を捕まれており殴られ続けた。

(屋上でリンチか…ありきたりだな…)

と頭の中で関係の無いことを考えていた。

ドゴツバグツ

と鈍い音と共に激痛が走る。

(たくつ…殴るのも下手だな…もういいか…)

と傷だらけになった所で腕を掴んでいた男達を吹き飛ばした。

「さて…これで正当防衛だよな？」

と相手を睨んだ。

相手はビビりながらも『うわあ』と殴りかかってきた。

俺はただ殴られた分を全員に倍にして返していった。

十分後…

『ひあ…や、やめへ…』

ドグウと鈍い音が響く…

周りにはうめき声をあげながら倒れている男子が十数名…

その中心に本来その役をするはずだった俺がいた。

「相変わらず鬼みたいだな…って鬼だったか」

と上から声がした。

俺は振り返らずに

「やっぱりもう一人はお前か…」

と振り返るとそこには髪は赤紫で肌は少し焼けているのか小麦色で瞳は薄紫っぽい藤色の瞳をしておりブレザーの前を止めずに中のシ

ヤツもだらしなく出している。

まるきり不良と言う感じの男子がいた。

「って事は静にはもうあったのか？」

「ああ…汐紫、お前みたいに遅刻はしないからな…」
こいつの名前は汐紫^{せきじ}

明るく無駄に喧嘩を好む奴だ。

約束事にもルーズで平気に遅れてくる。

「さて…もういいだろう…戻るぞ」

と言って汐紫と共に教室に戻った。

第八話：『佐藤 八重』（前書き）

更新が遅れてすいません。これからも少し遅れるかもしれませんがどうかよろしくお願いします。

第八話：『佐藤 八重』

教室に帰ろうとした時、数名の人間の声が旧校舎の裏から聞こえた。たまたま、俺達は帰りに遠回りをしたから通っているがここは人があまりこない場所…

しかも、会話が

『ねえ…金、持ってきたわよねえ？』

と明らかにイジメだった。

しかし、俺達は気付かれない様に通り過ぎた…もちろん、助けないのは理由があるからだ。

俺達が教室に着くと

「あら汐紫…来てたの？」

「ああ…屋上で寝てたらいきなりコイツが来たからな…起きるしかないだろ」

と会話をしているとクラスの端で会話をしていた女子が

『そうそう、冥界相談所って知ってる？』

と会話が聞こえた。

俺達の仕事はこんな風に噂からなっている。

もちろん、必ず近くに恨みを持つ人間がいる時だけ…

言うなれば、恨みを持つ人間がいる所へ噂が流れる様に冥界が操作をしているのだ。

「近い内に仕事が入るかもな…」

と俺が言うと二人とも頷いた。

その日の夜…

俺は静と汐紫の事を説明し二人とも泊めて貰うことが決まった。

そして、食事を食べ終わり、ゆっくりしていると…

ピリリリ

と携帯の電子音がなり響いた。

俺は携帯を取り出しディスプレイを見ると

【冥界相談所】

と書いてあった。

俺は電話を取った。

「もしもし、紅舞ですが…」

と言つと受付役の女性の声が聞こえた。

「依頼がありました。」

住所は送りますので依頼内容を確認の後に実行してください」

と言い電話が切れ、同時にメールが届いた。

メールには地図があり依頼主の家が赤く点滅していた。

とりあえず俺は死神の服装に着替える為に部屋に戻った。

部屋に戻ると壁に掛けていた侍が身に着けていそうな服装に着替え
た。

俗にいう袴だ。

色は死神の正装と言う事で黒が主体だ。

死神の正装は武器を決めた時に選ぶのであまり重なる事はない…

とにかく俺は着替えた後に冥界から持ってきた【妖刀・焰^{ほむら}】を腰に

さし草履を履いて出かけた。

依頼主の名前は佐藤^{さとう} 八重^{やえ}

昼間イジメを受けていた女子だ…

眼鏡をかけており髪は黒く三編みをしている。

よく言う頭のいい女子の委員長と言う感じだ。

そして、俺は人気のないビルに到着し携帯を操作し魔法陣を描いて
ある画像を再生させた。

すると、地面にその魔法陣が現れ光り始めた。光る魔法陣は輝きを
増していき俺はその中心に立った瞬間、魔法陣と共に消えた…

そして、出てきたのは依頼主の佐藤八重の部屋…

佐藤は驚いていたがこん反応はいつも見ているから慣れていた。

俺はゆっくりと口を開いた…

「冥界相談所を御利用頂きありがとうございます。」

私達は強盗や殺人など依頼を遂行しますが…それに見合った代償を

頂きます。

さあ…あなたの願いを…」

第九話：『邪鬼』

俺は佐藤から依頼の詳細を聞いた。

依頼は殺し、相手はいつもイジメをしている三人だ。

俺は依頼の詳細を聞いた所で紙を出した。

「これが契約書だ。」

ここに名前と血印をすればさっきの依頼を正式に受ける。

もちろん依頼を遂行すれば代償は頂く、つまりお前が死ぬ可能性がある
あると言う事だ。

引き返すならこれが最後のチャンスだ。」

と言って紙を渡した。

佐藤は静かに考えゆっくりと口を開いた。

「少し考えさせて…」

そう言われた俺は目を閉じたまま

「わかった。紙に名前と血印をすればいつでも依頼を受ける。

せいぜい悩むんだな」

そう言つて俺は消えた。

佐藤は一人になった部屋で考えていた…

俺は転送で廃ビルに戻り、俺は溜め息をつき刀を静かに抜いた。

そして振り返るとそこには邪鬼がいた。

口からヨダレを垂らし、昔話か何かに出てきそうな小さい鬼がいた。

このタイプの鬼は弱いが多く、リーダーがいる。

俺は携帯で静と汐紫にメールを送り前を見た。

何処から現れたのかゾロゾロとかなりの数の邪鬼がいた。

俺はもう一度溜め息をつき、ユラリと動き出した。

俺が動き出したのと同時に刀の刀身が燃え出した。

俺の動きに合わせて赤い残像が走る…

そして、ザクツと言う音がなると同時にギィーと言う叫びが響き
声がする。

そして、邪鬼はサラサラと砂になっていった。
その声がかっつけかけになり戦いは始まりをつげた…俺は刀を切り上げて振り下ろす。

ガチンと金属がしたのと同時に横へ振る。

ギギギ、と引きずり刀が中を浮き敵を一掃した。

しかし、敵の数は減らずに俺に突っ込んでくる。

俺はそれを避けながら一閃を入れた。

刀が素早くとてもキレがある動きをしていた。

無駄な動きがなく右へ刀が動いたかと思えば垂直に上へ動いたりと綺麗な直線の剣筋が残っていた…

第十話：『影』

俺は確実に倒しているはずなのに敵は減る気配を見せない…
俺はジリジリと後ろに下がらさせられていた。

ガララ…

と瓦礫が落ちる音を聞き後ろを見るともう後ろはなかった…

俺は刀を構えて敵を待ち構えていると…

ドオン！

と爆発音に近い音がした。

俺がそこを見るとそこには汐紫と静がいた。

「よお！苦戦してるみてえだな手伝ってやるぜ」

「お手伝いします。」

と言つと二人は別々の方向へ進み敵を一掃し始めた。

汐紫は拳にナツクルをつけ静は小太刀を両手にもっていた。

俺は

「すまない」

と一言だけ言い残し屋上へ向かった。

屋上に出ると満月の月が屋上を照らしていた。

そして、その真ん中にいる一人の人影…

そいつはゆっくりとこちらを向き「遅かったな…」と言った。

俺はカチャリと刀を握り直した。

その男は「さあ…始めようか…」と言われ戦いが始まった。

男はスウと消えたかと思うと突然、目の前に現れた。

そして、異様に長く鋭い爪が顔面へ一直線に襲いかかってきた…

俺はそれを紙一重で避けたがかすったのか頬に少し切傷が出来た…

この時、俺はコイツは先天性吸血鬼だとわかった…

「ほおあれを避けると言うことはそれなりの力の持ち主だね…」

とまるで小手調でもしたかのように語りだした。

俺は力を解放し相手を睨んだ。

『銀色の髪…なるほど君が紅舞か…丁度いい君の力、見せてもらう』
と言うと突然、敵の影が動きだした…

影は犬の様な形になり俺に襲いかかってきた。

俺はそれを避けて反撃しようとした時、犬は影に入り姿を消した。

そして、また違う影から姿を現し攻撃をしてはまた影に消えた。

俺は考える暇もなく、ただ今は防御に専念した…

第十一話：『魔族』

ウガア

と奇声をあげながら何度も襲ってくる黒い犬：

その攻撃を受ける度に攻撃の瞬間だけスキがあることに気が付いた。
俺は刀を構え犬を待った。

ウガアア

と現れた次の瞬間、ザシユ…と音がし黒い犬は消えた。

「ふむ…まだ戦う時ではないようですね。

ならあなたにピッタリの相手を選んであげましょう…」

と言い突然、魔法を唱えだした。

男が唱え始めると魔法陣が現れ赤紫色に輝きだす…

そして、その中から角の生えた人外な生き物呼び出す。

「なるほど…デーモンか…」

相手が呼び出したのは西洋の上級悪魔のデーモンだった。

しかも、ご丁寧に頭は羊の様な頭をしており黒い羽もある。

体もゆうに2mは越えている巨体だ。

男はデーモンを召還してすぐに影の中に消えた。

「置き土産か…仕方ねえ…殺るか…」

と俺は戦闘の体勢をとった。

今まで長年仕事をしてきたがデーモンを相手にしたのは数回だけだ…

しかも、全てギリギリの戦いをしてきた…ガア！

と声がすると影がいくつも枝分かかれし、俺を四方から囲いこむように襲ってきた。

俺はとつさに跳ぶと今度は真つ正面から爪が襲いかかってくる。

それを剣の腹で受け止めると今度は着地するであろう場所に魔法陣が浮かび上がった。

そして、着地と同時に魔法陣が爆発した。

俺は直撃こそ免れたが爆風によって壁に背中からぶつかった。

壁は勢いでへっこんでしまい、俺が前を見た時にはデーモンはもう攻撃してこようとしていた。

攻撃の威力、コンビネーション、戦略、全てが悪魔の中でも秀でて
いるだけがあった…

第十二話：『死合の末に』

グウルア！

と声を出し手に黒い球体を持ち突っ込んで来た…

俺はそれを辛うじて避けるとデーモンの球体は一瞬、大きくなつたかと思うと急速に凝縮し周りの物が消えた…

「な…魔力を凝縮してブラックホールを作つたのか？」

と俺は驚いたが攻めるなら今しかないと今度は反撃に出た。

俺は刀を振り降ろた。

ガチン！

と爪で防御されたが俺は力を入れ爪を台座の上に飛んだ。

そして、刀を構え突いた。

刀はデーモンの右肩に深く刺さつた。

そして、刀を抜き一旦離れた。

デーモンはその瞬間に影に攻撃させた。

俺はその攻撃に合わせ前に走り、影と影の間を着実に進んだ。

そして、デーモンの前に着き刀を前へ突いた。

今度はデーモンの腹部に刀が刺さり、そのまま刀を横へ力一杯に振りきつた。

刀には赤い血がベツトリ付いており、続けて攻撃しようとした時…

グアア！

とデーモンの爪が襲いかかるってきた。

この距離で避けれないと判断し急所を外す程度に体をずらし、俺も刀を振つた。

ザクリ…

と鈍い音がし両方とも離れた。

俺は左手をブランとぶら下げ肩からおびただしい血がダラダラと流れていた…

デーモンはガクンと膝から倒れ胸から血が溢れだしていた。

「その傷でも死なないか…何か特別な魔法がかけられているな…」
と愚痴を溢した…俺は左手が動くか試すが少しは動くが刀は持てそ
うに無かった…

俺は諦め右手だけで刀を持った…

「なら頭を潰すまで…」

と前に進んだ。

そして、刀が頭に突き刺さろうとした瞬間、デーモンの影が俺に向
かってきた。

ズブ…

と音がして俺の腹部に黒い影が深く刺さった…

俺の刀もデーモンの頭に刺さっていた…

さすがのデーモンもあちこちがボロボロと崩れ散った…

俺はヨロヨロと歩き壁にもたれ目を閉じた…

血は流れ続け円形に広がり続けていた…

第十三話：『戦いの後…』

暗い…

何もなかったの…

闇…

俺と言う存在しかない世界…

人はコレを夢と言うのだろうか？

夢…

なにもない…何も…

そう思った瞬間…

目の前に2つの扉が現れた。

二つとも扉には鎖がかなり嚴重にされていた。

そして、俺の右手にはいつの間にか鍵が一つ…

俺は何故こんな所に…

何の為に…

まず…俺は…

『誰だ…』

チュン…チュン…

鳥のさえずりが聞こえる…

「朝…か？」

と目を開くと俺は何故か屋敷に戻っていた…

そして、部屋の隅には椅子の上で寝ている恵の姿があった…俺は体を起こすと腹部に激痛が走る。

「つう…」

と痛みを噛み締める。

ズキンズキンと周期的に痛み腹部を手で抑える。

ジワリと服に赤い染みが少し出来た。

俺は次に左肩を触った。

こちらの傷はそれほど痛まない…

「肩の傷はマシ…みたいだな」

今度は完全に起き上がり携帯に登録してある私服を呼び出した。

P i …

と電子音がし、俺の服が一瞬で変わった。

そして、毛布を一枚取り恵に静かに掛けた。

「ん…んん…」

と可愛らしい声を漏らした。

俺はいつの間にか少し笑みを浮かべていた…

「お前…変わったな…」

と突然、声がし扉の方を見るとそこには汐紫がいた。

「どこが？」

と冷たく言つと

「俺が知ってるお前は笑うなんて事はなかった…お前変わったよ」

と再び同じ台詞を言った。

そして、汐紫は俺に近づき

「俺には今のお前の方がいいと思うぜ」

と肩をポンツと叩き少し笑いながら言った。

第十四話：『聖女』（前書き）

歴史上の人物例があがっていますが架空上の設定ですので実在はし
ないと思います。

第十四話：『聖女』

寝ている恵をそのままに俺は汐紫に連れられ大広間に向かった。

大広間の扉を開くと広い空間の中心に静が椅子に座りながら紅茶を飲んでいた。

そして、俺と汐紫は静と向かい合わせに座った。

少しの間、沈黙が続き俺が口を開いた。

「あれから何があった？」

つと聞くと二人ともピクツ！つと反応した。

「あのな…紅舞、先に言っておくぞ

今から言うことは全て事実だ。

それを頭に入れとけ」

と汐紫が忠告をしてから静が話を始めた。

「あの後、しばらく雑魚を相手にしていると突然、雑魚が消えたんです。

そして、屋上に行くと致命傷を負ったあなたが倒れていたんです。

」

そう…そこまでは俺もかすかに覚えている。

正直、もう駄目だなと思った程だ。

「私と汐紫は少し混乱をしつつもあなたを館にまで連れて来ました。

そこで恵さんがあなたを見て、『部屋へ！』

と言ったので汐紫があなたを部屋へ運びました」

そこで、少し話を区切り静は深呼吸をし話を続けた。

「部屋へ運んでから彼女はあなたの前に立ち指先を少しだけ切りあなたに血を飲ませました。

その後、あなたの体は光に包まれ致命傷の傷が癒えたのです…

そして、朝になり今にいたります…」

話を終えてしばらく静寂が辺りを包んだ…

「つまり…あいつは…」

と俺が言う前に汐紫が

『聖女だ…』

と言った…

聖女とは歴史上、表にはあまりでない…

しかし、出るものいる…

例えばナイチンゲールだ。

彼女は手をかざしたり血を飲ませるだけで傷を治したと言われたりしている。

日本で言うなら人魚の様な存在だ…

一滴、血をすすれば傷は癒え…

肉を喰らわば不死になると言われている存在…

聖女は必ず、残酷な運命さだめを歩み平穩とわと言言葉は永遠とわにない…

天に見放され、人に追われ、魔に狙われる悲しき運命を背負いし女性だ…

第十五話：『学園』

『聖女』

汐紫が言ったその言葉が頭の中で何回もリピートをした。

（聖女だろうがなんだだろうが俺には関係ないはずなのに何でこんな
に考えてるんだ？冷静になれ…）

と無理に冷静になったがいつの間にか俺は恵を見てしまっていた。

…であるからここはこうなる。

そしてこのXは…」

と授業が淡々と進む中で俺は授業に集中できなかった。

きんこくんかきんこくん…

とチャイムがなり級長が簡単な挨拶をすると昼休みになった。「紅

舞、顔色悪いよ？大丈夫？」

と気が付けば目の前に突然、恵の顔がアップで映っていた。

「え？うわ、わ！」

ガタン！

と俺は椅子と一緒に倒れてしまった。

恵は反射的に目を閉じたのだろう、目をゆっくりと開き

「くす、大丈夫？」

と笑いながら手を差し出してくれた。

俺は『すまん』と手を握り起き上がった。

（たく…何を焦ってるんだ俺は…）

と不思議に思いながらも倒れた椅子を立て直し座った。

すると机に恵が自分の弁当ともう一つの弁当を机に置いた。

「なんだこの弁当は？」

と俺が聞くと

「私の分と紅舞の文だけど…なんで？」

と当然の様に答えた。

これは『いや、なんでも…』と戸惑いながら箸を握った。

弁当を開けると二段になっており、上は白いご飯がぎっしりと詰められており、下には玉子焼きやハンバーグと言ったオカズが沢山あった。

「これ全部お前が？」

と驚きを隠せずに聞いてしまった。

「えへへ、料理は小さい頃から作ってるから自信あるんだあ」と自慢気に返してきた。

俺は一口ハンバーグを一つ取り口に運んだ。

横では恵が目を輝かせて感想を待っている。

「ん？うまい…」

心から自然に出た言葉だ。

「ほんとに?!」

と恵は俺の言葉を聞きとても嬉しそうな顔をしていた。

俺はこの時、こんな生活も悪くないな…

と思った…

第十六話：『依頼』

同時刻 八重

私はただ平穩に生きたかった…

ただ…ただ、それだけなのに…

「なに？このゴミ？」

と私の弁当を持ち上げて逆さまにする。

ポトポトと弁当の中身が私の頭に落ちる。

完全に落ちると女は私の弁当を放り投げて笑った。

「あはは！見てよ、やっぱりゴミにはゴミがお似合いね」

と言うと左右にいる女の友達と一緒に笑う…

こんなのは、いつもある。

ただこの日はひどかった…

突然、ハサミを持ち出し近づいてきた。

最初は何をされるかわからなかった…

私は目隠しをされ手と足を女の友達に捕まれた。

そして、女の笑い声が聞こえた次の瞬間…

ジヨキ…

と切る音がした。

私はその時、初めて何をされているか知った。

私の髪をハサミで切っているのだ。

私はイヤアと叫びながら暴れたが女は笑いながら切り続けた。

誰かが先生を呼んでくれたが来た時には遅く私の髪は席の周りにバラバラと散っていた…

しかし、女は逃げた後だった…

私は早退させてもらい家でただ泣いた…

泣き疲れ、憎しみが増してきた。

その時に机に目をやると夕日に赤く染まった契約書があった。

私は決心をし親指を噛んだ。

少し痛かったが次第に親指に血が広がり私は契約書に親指を押し付けた。
すると契約書は突然、丸くなり消えた。私はなんだかあっけに取られたが明日になれば分かるかと思いい部屋を出た…

紅舞

俺が平穏な生活に少し憧れ始めた時に依頼はやってきた…

俺が恵と家に帰っている時…

ピリリリ…ピリリリ…

と突然、携帯が鳴り響いた。

俺はポケットから携帯を取り出しディスプレイを見ると

【冥界相談所】と書いてあった…

その瞬間、俺には平穏が訪れる事はないと何だか教えられた気がした…

第十七話：『依頼の遂行』（前書き）

少しだけグロテスクな表現があります。

そういうのが苦手な方などはご注意ください

第十七話：『依頼の遂行』

人の世はなぜこんなにも醜く汚れているんだろうか…
親しい存在が次の日には怨み合う…
そんな事が日常になってしまったこの世界は何処へ進み…
どうなるのだろうか…

俺は閉じていた目をゆっくりと開いた。

俺の両側には静と汐紫がすでに死神の様な黒い衣装に着替えて待っていた。

「さて…行くか…」

と俺が一言、言っていると俺達は闇に消えた。

目指す場所は…

学校…

学校に着くとすでに目標の三人はいた…

俺達はお互いを一目見てから頷き行動を起こした…

目標の女子三人は夜の学校を恐る恐る進んでいた。

すると、女性のすすり泣く音が廊下に響いた。

「ねえ…何か…ヤバくない？」

と一人が言っているとリーダーらしき女が

「怖いのかい？」

と聞いていた。

それを言われてムツと顔を怒らせ

「そんな訳ないじゃん！」

と言っていると三人はすすり泣く声のする教室へ入っていった。

女性は暗闇の中、一人で泣いていた…

それを見た三人は恐る恐る中に入りその女性を確認しようとした。

すると三人の一人が…

「八重？八重なんでしょ？」

と口を開いた。

泣いていた女性は泣くのを止めてゆっくりと振り返る。

そこには、八重の姿があった…

「なんだあやつぱりアンタかあ！」

と急に明るくなり八重に近付こうとした瞬間…

ガタン！ガタン！

と扉が全て閉まってまった。

三人は八重を見て

「何を…何をしたのよ！ねえ！」

と走り寄ると八重はクスリと笑い消えていった…

そして、教室は徐々に暗闇に染まっていった。

闇に侵食され始めたのだ…

三人はパニック状態で扉を開こうとしたり窓を割ろうとするが出られない…

そして、完全に暗闇に包まれ俺が三人の前に姿を見せた。

俺は刀を抜き三人に向けた。

「これはお前を恨む人間の心だ…」

お前達は人をそこまで落とすし何を願う？」

とリーダーらしき女の喉元に刀を近付けた。

「まあいい…」

お前達を依頼の為に切る…」

そう言う俺は刀を降った。

ゴロン…

と音がし首と胴体が離れる。

しかし、残りの二人はもう目に光がなく完全に人格が崩壊していた。そこに汐紫と静が現れた。

「さてと、物を貰うか」

と言うと汐紫は一人の胸に手を突っ込んだ…

手は胸を突き抜けて汐紫の右手には心臓が握られていた。

「後で頂くとするか」

と言うと心臓が赤い血の様になり汐紫の瓶の中に入ってしまった。

俺達はこんな風に依頼者や依頼先の人物の一部を体内に取り込む事で力を増やしている。

一部は人によつて違い、汐紫は心臓、静は心を取る。

そして、俺は首のない女に近づき魂を抜いた。

そう、俺は魂を取るのだ。

俺達が必要な物を取ると三人の遺体は闇に飲まれ消えた…

これから彼女達は途方もない苦痛を永遠に味わう事だろう…

そして、それは依頼主の八重にも訪れる…

第十八話：『暗闇』

俺は依頼を済ませた日は何故かいつも寝る事ができなかつた…

それは罪悪感からなのか、それともグロテスクなあの光景が残っているからなのかは分からない…

俺はベッドとタンスしかない質素な部屋の隅で壁に持たれながら足を片方伸ばし、もう片方を腕で抱き抱えていた…

部屋は夜更けという事もあり暗闇に包まれている。暗い部屋…

何もない部屋…

そして今の自分…

空っぽの…自分…

昔と変わらない…

言われた事をただ忠実に行う人形…

その為に感情なんて物はなかつた…

小さい頃から殺しの技術を教え込まれてきた…

今でこそ相談所で働いているが昔は人間狩りをしていた…

人間狩り…悪事を尽くし魂が汚れ黒くなった者を運命という名の絶

対存在に逆らい人間を裏で狩る事…

それは神に逆らう行為…

しかし、それを招くは人の業…

人の業は深く醜い…

人と人は繋がって生きている…

しかし、その繋がりを断つのも人…

子は親を裏切り、親は子を裏切る時代…

幸せで笑い合う家庭…

しかし、壁一枚を隔て隣では親の愛を知らず虐待に耐える子供がいても気がつかない…

昔は人と人の繋がりが多く壁は破る為にあつた…

しかし、現代では約10cmの壁があれば何が起きているか分から

ない…

厚く…破れない人が作りし壁…

そして業は積もり人を殺す…

俺は狩る度に人は何故こんなにも業が深いのか分からなかった…

汚れた血で染まりつた自分の手…

落ちる事ない赤い…紅い血…

そして、ふと目を開くと自分の手が血まみれに見えた…

ピチャン…

ピチャン…

と血が滴り落ちる音がする…

気が付けば周りには死体が転がり地面は血で赤く染まる…

俺は怖くなりその場から走り出した…

走っても走っても周りは赤い…

紅い…

アカイ…

いつしか俺は幼くなっておりただ泣いていた…

暗闇の中、血だらけの地面…

ただ泣くしか出来ない自分…

その時、どこからか白い手が現れ俺を抱きしめてくれた…

「もう大丈夫だよ」

その声を聞き俺はとても安心した…

そして…暗闇から光が溢れだした…

「起きて…もう朝だよ…」

と声がした。

いつの間にか眠っていたらしく目を開くとそこには恵がいた。

朝日が差し込み恵が少しだけ綺麗に見えた。

「おはよう。」

今日もいい天気だよ」

と屈託のない笑顔で言った：

俺も起き上がり

「ああ…そうだな」

と表情を変えずに返事を返した。

第十九話：『変化』

目を覚まし洗面所に向かった。

身だしなみを整え食事に向かうと既に皆が食事をとっていた。

しかし、恵だけ手をつけていなかった。

どうやら、俺を待っていてくれたらしい…

俺は恵と目を合わせてから一緒に手を合わせ食事を取り始めた。

この時から俺は違和感に捕われていた…

今まで食事はとっていたが味は薄くあまり美味しいとは思わなかった。

しかし、何故かこの時、一口食べるととても美味しいと思った…

俺はついつい

「何か：変えたのか？」

と聞いてしまった。

しかし、料理を作ったメイドさんは『いえ…特には…』と返され俺は不思議に思いながらも食事を全て食べた。

そして、学校に行こうと用意をしようとした時…

プルプル…

プルプル…

と電話の音が二回した。

どうやらメイドさんが出たらしい

そして、俺達が各自の部屋に行こうとした時…

「皆様、先ほど学校からお電話があり

本日は臨時休校にするそうです。」

とメイドさんが言ってきた。

俺達は驚き『え？』と声を漏らしてしまった。

するとメイドさんが詳しく話をしてくれた。

「どうやら、本日皆様の学校で変死体が複数見つかったとかで警察の方々が来ているそうなんです。」

その為か臨時休校になったそうです。」

つと言われ俺達の昨日の依頼を思い出した。
たまにこんな事があるので俺達は心の中で（昨日のやつか…）と咳
いていた。

とりあえず学校は休校になったので俺達は部屋に戻りのんびりする
事にした。

俺は部屋に戻ると携帯を取り出しニュースを見た。

「変死体…変死体…つと…あつた、え〜つと…学校内で体のあちこ
ちが食べられたようにぐちゃぐちゃな死体が5つ？」

その文を見て俺はおかしいとすぐに分かった。

「待てよ…俺達は三人だ…それを入れても二人多い…まさかあそこ
の近くにハグレがいたのか？」

と推測していたが推測は所詮推測、そうだとしても結局警戒するし
かないので深く考えるのは止めてとりあえず警戒を怠らない事にし
た。

そして、携帯をいじっていると

コンコン…

つとノックが聞こえた。

「はい…どうぞ…」

と少し大きな声で言う『お邪魔します』と恵が顔を出した。

そして、突然俺の前に立ち

「ねえ？今…ひま？」

と聞かれた。

俺は正直に

「ああ…」

と答えると少しニヤリと笑いこつ続けた。「ねえ…買い物に付き合
つてよ」

つと目を輝かせて言った。

俺はこのまま部屋に居ても変に考え込んでしまうので気分転換にい
いと思

「分かった」

と答えた。

今日は学校がないので食事が終わってから部屋に戻った時点で着替えはしていたのですがすぐに二人で出掛けた。

第20話：『平穩』

二人で駅前まで行く途中で学校の近くを通った。

校門は閉まっておりその前にマスコミ達が集まっていた。

そして、校門には警察達が必死にマスコミ達に帰る様に説得していた。

俺と恵はそれを横目に見ながらも先へ進んだ。

駅前に着き、恵に買い物付き合わされた。

俺は恵が下着を買いに行ったので下着が売ってあるデパートの三階で休んでいた。

恵が言うにはブランドばかりじゃなくこう言う所だからこそ良いのがあるらしい…

どっちにしろ俺には分からない話だが…

カフェオレを飲みながら逆ナンしてくる女を断る事、約13回。

やっと恵が帰ってきた。

「ごめ〜ん。

じゃあ行こっか」

と一緒に歩き出すと最後に逆ナンしてきた女が少し悔しそうに恵を睨んでいた。

その後、帰る前に恵がよく行くと言う喫茶店に行くことになった。

駅前から少し離れ人通りが少なくなってきたところとその喫茶店はあった。

One day

そう小さく書かれた看板がさらに寂しさを増していた。

カランカラン…

と扉を開けると同時に

「いらっしやいます〜」

と女性の声がした。

俺と恵が一步前に進むと

「二名様ですか？」

「こちらへどうぞ」

と青い髪に金色の瞳のウェイトレスの女性にカウンターの前へ案内された。

俺と恵は目の前にあるメニューを手に取った。

「えっと…イチゴケーキのセットをカフェオレで」

と恵が先に頼み続いて俺が

「タマゴサンドにアメリカンで」

と頼むとマスターは静かに作りだした。

店は静かで俺達以外に客は誰も居なかった…

さらに夕日が窓から差し込みとても綺麗だと思えた。

しばらく窓から外を覗いていると

「恵、久しぶり」

とさっきのウェイトレスがやってきた。

「久しぶり〜ベル」

恵と知り合いらしく世間話をしていた。話が終ると俺を見て

「こちらは？」

と聞かれ恵が紹介を始めた。

「彼は紅舞」

そう紹介され俺は静かに頭を下げた。

「紅舞、こちらは」

と紹介しようとした時

「私はベル、本名はヴェル・セイントクロス

長いから短くしてベルって呼んでね」

と見つめられたが目を見れば見るほど吸い込まれそうな感じになり

気分が悪くなる…

目を反らしカウンターに視線を戻すとマスターが頼んだ物を出して

くれた。

俺はコーヒーを見つめていた。

いや正確にはコーヒーに映っている自分の目を見ていた。

セピア色の瞳…

見れば見るほど殺してきた人を思い出す…

まるで…俺の瞳は返り血で濁っているようだった…そしてベルもそんな俺をまるで監視するように鋭い目で見ていた…

第21話：『闇』

なんだかんだで店を出る時には辺りは暗くなっていた。それでも街は明るく人が忙しそうに歩き回っている。

何人、気付いているのだろうか…

この世に居てはならない存在がいる事を…

いつもならお互い干渉しないのだが…

ドン…

とサラリーマン風の男とぶつかった…

そして…耳元で…

「狩りは始まった。

いつまで守れるかな？」

と言つて裏路地へ消えた。

俺は恵をとつさに抱きしめると…

ガツシャーン！！

と恵がさっきまで居た所にトラックが突っ込んできた。

俺は恵の手を握り、さっきの男を追いやる為、裏路地へ向かった。

街は明るく華やかなのに少し裏を歩けば暗く人も少ない…

光の下に人が集まるなら…

闇の下には人外が集う…

俺達は男を追いかけビルに入った。

ビルはまだ建設中なのか骨組みの鉄筋だけしかなかった。

そして、いつの間にか俺達の周りにはさっきのサラリーマンを含め

大量の人がいた…

いや…人だった存在…と言わなければならないか…

「グールか…」

と俺は呟いた。

グールとはバンパイアに血を吸われ、知性を失い、血を吸った主の

命令を忠実に実行する人形…
ひとがた

俺は携帯から刀を呼び出し戦いの構えをとった。

敵が何体居ようが関係ない…

ただ…俺は…

「守りたいモノを守るだけだ!!」

その時、

クスクス…とどこかで誰かが笑った声が聞こえた気がした…

そんな事を気にする前にグール達は襲いかかってきた。

どうやら今回の目標は恵ではなく俺のようだ。

「丁度いい…」

恵…下がっててくれ…」

そう言っただ俺は敵のど真ん中に立った。

そして、力を解放しようとしたが…

どうやっても力が解放できなかった…

「くっ…」

と仕方なく力を解放せずに戦った。

いくらグールとはいえこの数では俺の体力が先に尽きるか…

グールの数が先に尽きるかの争いだっただ…

いかに俺が力に依存していたのかこの時、痛いほど分かった…

第22話：『無』（前書き）

最後の方で少し変わった表現に挑戦してみました…最後の言葉には
様々な意味を含めています…

第22話：『無』

ズブ…ギャア！

深々と刺さった刀を抜き振り返りながら刀を横に振る。

ブシュウ！と赤ではなく黒に近い血が舞う…

ハアハアハア…

と俺は息を切らしていた。

俺は力が使えないと分かってから、まず恵を逃がす事を優先させた。

理由は守り通せる自信が今はないからだ。

それに一人では限界がある為に汐紫と静に救援を頼む為だ。

その恵はさつきなんとか逃がし今は俺がグールを相手にしている。

とは言え…倒しても倒しても数が減る気が全くしない…

「これは…ハアハア…グールだけじゃねえな…影も混じってやがる

…」

影とは言わば吸血鬼の分身…

影なので力は本体よりかなり劣るがカスほどの力で作ればほぼ無限

に作る事が出来る。

「つたく…カスがグールと同じとは…ハアハア…かなりの力だな…」

刀を前へ出しヒトガタに突き刺す。

そして、両手で刀を持ちそのヒトガタを蹴り刀を勢いよく抜き、そ

のまま刀を横に向け思いつきり刀を振る。

すると、ヒトガタの胴体が綺麗に二つに分かれ地面に落ちた。

そして、壊れたヒトガタはサラサラと砂に還っていった…

いくら壊しても砂に還る為に山になることもない…

そして、減る気配のないヒトガタ…

まるで俺が一人で空回りしている様な気分だった…

ハアハアハアハア…

体が重い…

そう思ってしまった瞬間、グールが襲いかかってきた…

俺は『しまっ…！』と途中で壁まで一気に吹き飛ばされた。
ドオン…！

と爆発音に近い音を響かせ俺は全身を強く打ってしまい、一気に口に血が逆流してきた。

「うぐ…ゲホ…」

と俺は血を吐き出してしまい…

そして、体から力が抜けて行くのが分かった…

そんな俺の周りにグール達が集まってくる…俺はゆっくりと目を閉じ死を覚悟した。

その時、頭の中で声が聞こえた。

『全く、駄目弟子ね…』

貴方にそんな無様な戦い方は教えてないわよ…

ほら、目を覚まして…

まだ、目の前に獲物がいるでしょう？』

その言葉を聞いた瞬間、昔の自分を思い出した。

心を無くし…

情を無くし…

潰し…

壊し…

殺し…

消せ…

その言葉が頭の中を巡っていく…

つぶせコワセ殺せケセ…

(止める…！)

ツブセ壊せコロセ消せ…

(止める！起こすな！)

俺は必死に反発してみるが意識は俺を徐々に蝕み闇に落ちて…墮ち

ていく…

そして…

潰
殺
壊せ消

四つの言葉が頭の中で完全に混ざり合い…

「ヤメロオオオオオオオオ！！！」

俺は…

オ
チ
タ

第23話：『穀と空』（前書き）

えっと一応ですがタイトルは『からとそら』ではなく『からとから』
と読んで下さい（＾－＾；）

第23話：『殻と空』

空っぽだ

何も無い…

白もなく…黒くもない…

上も無ければ下もない…

『無』と言つ言葉もなく…

ただ…

空っぽ…

嫉妬、恐怖、痛み…

喜び、楽しみ、笑い…

全部が『から』…

殻が無くなり、空になった…

同時刻

ハアハア…

俺と静は恵の家でゆっくりしていると突然、恵が帰ってくるなり

『紅…んく…紅舞が…大変!!』

私、廃ビルで逃げるのが精一杯で…』

と何を言っているのか分からないので落ち着かせ話を聞くと…

どうやら、力が使えずかなりの数のグールを相手に殺り合っている

ようだ…

それを聞き、俺達は急いで飛び出した。

そして、その廃ビルに着いた時…俺達はただ…驚いた…

大量のグール達の中心に無気力な状態でただ立っている紅舞がいた…

周りのグールは動かずに最初は様子を見ている様に感じたがそれは違った…

紅舞がにやり…と少し笑うと周りのグール達は積木が崩れる様にガラガラと肉片になった…

そして、それは残らず砂に変わっていく

しかし…その中にいた本体の吸血鬼…

恐らくはかなり上位の吸血鬼だろう…

しかし…明らかに何かを恐れている…

その視線の先には…

紅舞…

紅舞はゆらり…と揺れたかと思うと次の瞬間には吸血鬼の腹部を深々と刺していた…

吸血鬼も最初は気付かずゆっくりと視線を下へ下げた。

だが…紅舞はそんな暇を与えず刺したまま剣を上へ向ける。

自然と吸血鬼は上に持ち上がり重力によりズブズブと深く…深く刺

さつていく…

『ぐあ…ああ…』

と既に意識が途切れ様としている…

しかし…紅舞には関係ない…

刀をグチュグチュと右に回したり左に回したりしている…

まるで子供が無邪気に遊ぶように…

純粹に楽しそうな顔をしながら…

血がボタボタと大量に落ちて行く…

服にはベツトリと血がついていた…

吸血鬼の体がビクンビクンと数回…痙攣を起こし動かなくなった…

すると紅舞はつまらなさそうに上を見上げた…

夜空には満月が光っており…

その光の下に紅舞がたっていた…

口は笑っているのに、目から涙を流している…
刀から血が滴りオチており、ぴちゃん…ぴちゃん…と音がこだまする…

俺は知らず知らずの内に唾を飲んだ…

それはただ言える事は…

ただ…

ただ…

自分『も』オチそうで怖かった…

何故かは分からない…

でも…怖くて…

怖くて…逃げたいのに…逃げられなくて…目が…

離れない…

同時刻

『どうやらまだ不安定だけど上手くいつてるみたいね…』

闇の中…彼女はそれだけを確認し満足そうに廃ビルを後にした…

黒と白の羽を残して…

血は相変わらず滴りオチル…ぴちゃん…ぴちゅん…

と音を立て…

ただ…ゆっくり…ゆっくりと…

確実に…オチて行き…

そして…

波紋を広げる…

止まる事なく…

広がり…続ける…

第24話：『悪夢』

ぴちゃん…ぴちゃん…

何かが滴り落ちる音がする…

落ちた所からは波紋が広がっていくが周りが暗く広がっている事しか分からない…

そして…次に襲ったのは鼻につく異臭…

息をするだけでむせかえる…

そして…胸に何かがこみあげてきた…

「うぐ…」

と声を出し…吐いた…

口の中に胃液が残り気持悪かった…

今度は俺の足に何かが当たる感触があった…

冷たくて何だか少し柔らかい…

そして顔を近づけた時にそれが何かしった…

俺の足元にあったのは死体…そして周りの水は全て…血…

なによりこの死体は…

「ウワアああアアああ！」

ガバツと起き上がり目の前にガチャと銃を構える。

「ツチ…また、この夢かよ…」

紅舞が暴走をした後…

あいつは意識を失った…

それから3日もたったいまでも目を覚まさない…

そして俺はこの3日間さっきの夢を見ていた…

俺は手に銃を持っている事に気付き…

「もう…出さねえつもりだったのに…」

と唇を噛んだ。

この銃はある人に憧れて買った銃…

これを知った時が同時に紅舞を知った時でもある…

「汐紫…どうかしたの？」

と静がドア越しに聞いてきた…

「なんでもねえ」

と返事をする。と静は…

「なら、下に降りて来て…」

ちよつと話があるの…」

と言つて足音が遠ざかった…

俺は上を脱いで寝ていたので上を着てから足早に下に降りた。

途中で部屋の前に飯が置かれた所があった…

ここは紅舞の部屋で恵が飯も食わずに紅舞が起きるのを待っているのだ。

とりあえず静が下にと言っていたので俺は応接間に行った。

最初は何事もなく座っているように見えたがよく見ると目の下にクマが出来ていた。

「寝てねえのか？」

「寝てもいい夢を見ないの…」

今朝のあなたと同じよ…

もう…眠るのが怖いの…」

それからしばらく…沈黙の時間が続いた…

「それより依頼があつたわ。

どうやら他の人がもう契約までしてるみたい…」

「つまり…俺達に実行をするように仕事が回ってきたわけか…」

と言うと静はこくりと頷いた。

少しタイミングが良すぎると思ったが仕事なら仕方がないので行くことにした…

第25話：『深遠』

その夜：

結局俺たちは依頼を果たす為に現場に向かっていた：

現場は：この前の裏路地だった：

（偶然にしては出来すぎじゃないか…）

俺と静はゆっくり、ゆっくりと前へ進んだ。

この前の場所：

今、ここに立つだけでも思い出してしまう…：

俺はそれを忘れようと頭をぶんぶんと左右に振った…：

しばらく沈黙が続き、人の話し声が聞こえた。

ターゲットが近づいてきたのだ。

「汐紫、フィールドは張ったわ

いつでもいけるから」

と静がパソコンをいじりながらそういった。

「わかった…はじめるぞ！」

と声を出し、遂に任務が始まった…：

その頃、恵達は…

「…起きるよね…」

暗い部屋の中、ぼつりと恵がそういった。

その視線の先には…

紅舞…

整った顔はそのまま

こう見ているとまるでただ寝ているだけの様にも見える…：

紅舞にはそれほどひどい傷もなかったので力を使うことも出来ず
何度か意識を戻すために力を使おうとしたが…
紅舞がその度に苦しがる…

そんな恵が出来る唯一のことはこうして看病すること…
とは言え、本人も寝ずにここまで来ているのだ…
体には相当な負担がかかっていた。

そして…恵は紅舞の顔をずっと見てみると睡魔が一気に襲い掛かっ
てきた…

恵は抗う暇もなく…
ポテンと眠りに落ちた…

暗い暗い闇の中へ…

なぜひていスル？

俺の汚い部分だから…

なぜ忘れようとスル？

あの頃はいい思い出より悲しい思い出の方が多かった…

なぜ聞こうとしない？

真実を知るのが怖かった…

ナラ…お前はナンノ為に…ドンナ風に…

『生まれただ？』

何処からか聞こえてくる片言の声…

俺のいやな部分を全部、掘り返してくる…

「お前は誰なんだ！

顔を…姿を見せろ！」

そう叫ぶと目の前に鏡が現れた。

『こうしないと分からないのか？

俺はお前の影だ。

つまりこの姿と同じ鏡みたいなものさ…

いくら鏡が正反対でも全然関係ないの物は写さない…

写す部分があるからこうして見れるんだよ…』

そう言われ俺は反論する事は出来なかった…

何故なら…こいつの言うとおりだからだ…

こいつは昔に封印をした自分の姿、そのものだった…

自分で考えずに相手の言われる事を…ただ、言われた通りにする…

その生き方はすごく楽だった…

でも…それが間違っている事に気づいた時…全てが遅かった…

俺は人もヒトでないモノも…殺しすぎた…

自分の手を見れば今でも血まみれな気がして仕方がない…

いや…手だけじゃない…体中の全てが汚れている気がした…

だから…逃げた…記憶を封印し今の自分を作った。

でも…もう逃げられない…

「俺は楽になれるのか？」

そう聞くと鏡に映った自分はニヤリと笑みを浮かべ

『そんな訳があるか…お前は生きるさ…生きて生きて…そして、最後に死ぬ…』

よく、殺したり乗っ取ったりするが…あんなのは2流だ。

本当の恐怖つてのはこの世界に転がってる。

お前達がそれを見ようとしなだけなんだよ

まあそのうち分かるさ…

なんでそんな事を言ったか…そして、お前の真実も…な…』

そう言つて鏡は消えた…

「また…一人になつちまつたんだな…」

暗闇の中…俺はまた一人になり…

三角座りをした…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2387a/>

鬼さんこちら...

2010年12月10日14時48分発行